

## 距離の現象学 (II)

### (2) 人類の家出

『旧約聖書』の「創世記」は、「人間の現状」(人間が自己意識をもっていること)の原因譚として、人間が距離をもたなくては不安な存在であることを、つまり自己意識をもつに至った経緯を実に見事に描き出している。

アダムとエヴァは、神の命令に背いて「禁断の木の実」を食べてしまった。彼らは知恵を得た代償として、エデンの園を追われる。知恵をもっているとは、巻き込まれから抜け出た状態である。つまり自己の居場所を確定して、そこから自分の回りのものを自己化していくことが可能になった状態である。「禁断の木の実」(知恵の実)を食べたアダムとエヴァは、自分たちが裸でいることが恥かしくなった。自己の居場所の確定とは、自己意識をもつことと同義である。裸でいることが恥かしくなるとは、裸である自分を意識して

恥かしくなるのである。つまりアダムとエヴァとは、互いに相手に映った自分を考えることによって、自分の存在を確認する。

キルケゴールは『死に至る病』の冒頭で、自己について次のように語る。

「人間とは精神である。精神とは何であるか？ 精神とは自己である。自己とは何であるか？ 自己とは自己自身に関係するところの関係である、すなわち関係ということには関係が自己自身に関係するものなることが含まれている、——それで自己とは単なる関係ではなしに、関係が自己自身に関係するというそのことである。」(『死に至る病』岩波文庫、二〇頁)

自己とは関係の総体であり、結局自分自身が問題となるような関

那須 政玄

係である、という。つまり、アダムとエヴァに関して言うなら、自己とは、アダムとエヴァとの関係という形でアダムの中に形成された「アダムの像」である。アダムとエヴァは夫婦関係にあるという場合、夫婦という概念は、互いに独立したアダムとエヴァとを結びつける役割を果たしているだけであり、実体的に存在しているのはアダムとエヴァだけであり、夫婦という概念は、それらの実体を前提した上での関係（結合）であるにすぎない。しかし「関係としての自己」とは、関係そのものがアダムの自己になるということである。エヴァとの関係が生ずる（裸でいることが恥かしくなる）以前のアダムは、まだ自己をもっていない。アダムもエヴァも両性具有的の一つであった。つまり、アダムもエヴァも人類そのものを生きているのである。「恥かしい」という形で、エヴァがアダムの前に現われたとき、つまり人類という一様性の中からエヴァが切り裂かれて出てきたとき、アダムは自分の自己を獲得したのである。したがってエヴァなくしてアダムは存在しないし、またアダムなしにエヴァは存在しない。他者を自分の中の自分ではないものとして確定できたとき、同時に自分も他者ではないものとして確定されているのである。乳児が「ママ」と叫んだとき、乳児はママではないものとしての自分を獲得する。ママからの分離（ママを目の前に据えること）、つまり乳児がママとの関係を確立することは、同時に乳児の自己の確定である。

エデンの園は、アダムもエヴァもそこへと巻き込まれている一様性である。神の命令がその一様性を切り裂く。もちろんエデンの園

の一様性が切り裂かれたと考えるのは、アダムとエヴァだけである。なぜなら、アダムとエヴァは、エデンの園においてすら、神の命令を聴くのに十分な耳（資格）をつねにすでにもっていたからである。アダムとエヴァの耳は、すでに神の命令を聴従するために存在していた。したがってエデンの園は、アダムとエヴァにとって、すでに離れ去るべき場所として存在していたことになる。もちろんそうではあってもいつ離れ去るかは確定されていない。ただ必ずいつかは離れ去らねばならなかったことだけは事実である。

神の命令に背く以前に、アダムとエヴァは、すでに人間になる（自己を意識する）可能性を有していたのだ。動物は動物にとどまべく、神の命令を聴くのに十分な耳をもっていないなかった。だからエデンにおいても、否、神の命令に背く以前にも、アダムとエヴァは動物ではない状態にあったのであり、むしろ人間と動物との「中間状態」にあったのである。キルケゴールはこのような「中間状態」にいるアダムとエヴァについて次のように語る。

「この状態（エデンの園に在るといふ無垢において精神が夢見ているとき）には、平和と安穩とがある。しかも同時にそこにはもつとちがった何かがある、ただしそれは断じて不和や争いではない、——なぜと云ってそこには争うべき何ものも存しないからである！ それならそれは何であるのか。無だ！ しかしどういふ作用をするのか、——無は！ それは不安をつくりだす。無垢が同時に不安であるということが、無垢の深い秘密である。夢見

つつ精神は自己自身の現実性を前に投影する、ところでこの現実性は無である、さてこの無を無垢はたえず自分の前に見ているのである。」（『不安の概念』岩波文庫、六八頁）

「無垢において人間はただの動物なのではない、もしも彼がその生涯の或る瞬間においてただの動物であったとしたら、彼は一般に決して人間とはなりえなかったであろう。そういうわけで、精神がその場にいるのである、但しそれは直接的な夢みるところの精神としてである。」（前掲書、六八頁）

キルケゴールによれば、中間状態とは「無に対する不安」をもっている状態である。「無垢」はすでに「人間」に特有なものである。なぜなら動物は「無垢」とそうでない状態との区別がないほどに「完全なる無垢」（これはすでに「無垢」とも言えない）の中にいるからである。しかし「人間」は、無垢の不安を通じて無を知っている。

中間状態においても、アダムはすでに人間的可能性を宿している。その可能性の証しは、「精神」である。「人間」は精神をもっているからこそ、無垢の中でも不安を感じるのである。精神は、自己という形での関係づけを欲する。精神は無垢（エデンの園にいること）の中で憩っていることはできない。精神にとって無垢という一様性は不安なのである。充足され、あまりにも幸福な家に育った子供が不安を抱くのは、その家があまりにも深く子供を巻き込みすぎ

て、精神の関係づけを不可能にする底無し沼であるからである。

キルケゴールに言わせれば、エデンの園においてもすでに精神は「夢見る精神」として活動している。精神は、無垢の不安ゆえに絶えず関係づけの機会を伺っているのだ。だから神の命令は、精神にとっては、自らを展開する千載一遇のチャンスであったのである。

聖書では、蛇の誘惑によってアダムとエヴァは神の命令に背いたことになっているが、誘惑する蛇は、精神（神）が送り出した使者なのである。関係そのものを実体化して自我と呼び、次に自我を実体化して一人歩きさせることは、関係づけることが可能ではない。「無の一様性であるエデン」を離れることによってはじめに可能となる。

人類は、エデンを離れて（家出をして）人間となった。つまり、エデンを離れるという代償なしには、アダムはエヴァを目の前にもつことはできなかったためであり、すなわちアダムとエヴァとの間に距離が存在するようにはならなかったのである。

考えられた家出…出家（宗教の起源としての家出）

家出が盲目的・衝動的であるなら、出家は熟慮的であり、結果的にそうであったとはいえあくまでも手段として考えられた家出である。ここでいう出家とは、仏門に入るとか、日常生活を脱して宗教生活に入ることだけを意味するのではなく、家出の一つの特殊な在り方と考えられるものである。多くの宗教者、特に開祖が幸せな幼年期を（少なくとも極度の不幸の中にはなく）過ごしながらかも、求

道的に出家するのは共通的特徴である。

すでに見てきたように、旧約聖書は、神による人間のエデンの園からの追放を「人類の家出」とみなして、われわれ人間が自己を所有している在り方の原因を語る。エデンから距離をとってしまったことが人間らしさを形成するのであるが、そのことはまた人間がかつていた場所を（すでに人間であることが欠落させてしまったものを）再発見させてしまったことをも意味する。この欠落は、経済的欠乏とか道具的不在とかを意味する欠落ではなく、人間存在そのものにおける欠落であり、また人間存在そのものを形成するための欠落でもある。この人間存在の根底にある欠落が、宗教的活動を人間に促す。日常的な欠落（感）は、それを埋め、補填すれば解消する。一万円の借金は一万円を返却すれば解消するし、犯罪者は犯罪に見合った罰を受ければ犯した罪は解消される。しかし、人間存在の根底にある欠落（感）は、いかなる解消をも拒む。もちろん拒まれてしまうのは、人間であることを放棄しないという前提があつたことである。人間存在と同根の（等根源的な）この欠落感は、人間存在の在り方の変更を強いる。エデンの園からの距離を隠しつつ成立した日常性は、この根源的欠落感によって脆くも崩壊してしまう。つまり、日常性が自己意識あるいは自己の存在を自明なことで前提して成立しているのに反して、宗教性はこの自明な自己を厭わしいものと捉える。あらゆる宗教の根底に共通に認められることは、エデンの園への帰還、極楽往生、あるいは「阿字のふるさと」へと帰ること、つまり日常的人間存在からの脱出である。

### ① イエスの「離れ」

#### i 両親・家からの「離れ」

イエスは家出も出家もしなかった。なぜなら彼にはもともと家になかったからであり、また彼にとつての家とはイスラエル民族そのもの、あるいは彼が育った地ナザレであったからである。福音書のイエスは彼の偉大な生涯を特徴づけるために、すでに出生以前から神の祝福を受けたものとして規定される。イエスの母マリアは、まだ婚約の身であるときに、天使ガブリエルから次のような神の言葉を聞く。

マリアよ、恐れることはない。神からお恵みいただいたのだから。

見よ、あなたは子をさすかり、男の子が生まれる。その名をイエスとつけよ。

その子は大いなる者となり、いと高きお方の子と呼ばれる。

（ルカ、1―30―32）

福音書において、イエスは特別な人として描かれる。その「特別さ」は、イエスが生まれたときから、否、生まれる以前からすでに家や母から離れていることよって明らかにされる。

父親ヨセフは、イエスの誕生のはじめから影が薄い。ダビデ家の出自で大工を職業としてのことぐらいいしか書かれていない。そしてイエスにとつての「父親」は、ヨセフから「天の父」へとシフト

する。イエスが一二歳のとき、過越の祭りのために両親とともにエルサレムに行き、そこからの帰りに両親はイエスを見失ってしまふ。両親はエルサレムに残って教師たちと話をしているイエスを見つける。

「坊や、どうしてこんなことをしましたか。ごらん、お父さまもわたしも心配して、あなたをさがしているではありませんか。」  
彼は答えられた、「なぜおさがしになったのです。わたしが（天の）お父さまの家にいるのは当り前でしょう。ご存じなかったのですか。」

（ルカ、2―48―49）

イエスは自らが神に祝福されたものであることを知っている。したがってイエスが「天のお父さまの家にいる」ことは当り前なのであり、両親が血眼になって迷子になったイエスを捜すのは、イエスにとつて奇異なのである。イエスはもともと両親から離れているのであり、イエスが自らの子であつてまた神の子であることを心に深く刻みつけるのは、母マリアだけであり、ヨゼフではない。

ii イスラエルの民から・故郷からの離れ

イエスは、イスラエルの民からも離れた存在である。特別な人イエスは、イスラエルの民でありながら、救世主<sup>キリスト</sup>としてイスラエルの民を越えている。イエスの出生は、天使の羊飼ひへの通告によつ

て、一般のイスラエルの民に告知される。

天使が言った、「こわがることはない。いまわたしは、イスラエルの民全体への大きな喜びのおとずれを、あなた達に伝えるのだから。実は今夜ダビデの町に、あなた達のために一人の救い主がお生まれになった。このお方がかねて預言されていた救世主<sup>キリスト</sup>なる主である。あなた達はみどり児が産着にくるまれて飼葉桶に寝ているのを見る。それが救世主<sup>キリスト</sup>の目印である。」

（ルカ、1―10―12）

また、イエスの誕生から四〇日目に、律法に従つておこなわれる宮への初詣での折りに、救世主を見てから死のうと決意していた老人シメオンはイエスに出会う。そのときのシメオンの神を賛美する言葉は象徴的である。

「今こそ、主よ、あなたはこの僕<sup>しもべ</sup>をして

お言葉のとおり安らかにこの世に暇乞いをさせてください、わたしの目が、もうあなたの救いを拝見しました」からです。

この救いこそ、あなたが、全人類のため、その目の前で、用意されたもの、

「異教人には啓示を」

あなたの民、イスラエルには栄光をあたえる「光」でありませぬ。」

イエスはイスラエルという民族を離れ、全人類の救世主なのである。全人類の救世主であるイエスは、その普遍性ゆえにイスラエルの民のうちに自らの居場所をもたない。そして結局、シメオンの予言どおり、「この世の烈しい反対を受けて」しまうのである。

イエスはまた故郷からも離れる。イエスが伝道を開始した頃、イエスの故郷ナザレでの説教の様子は、故郷から離れなければならぬイエスを描き出している。故郷の者たちは、イエスを救世主とは見なさず、単に「ヨセフの息子」と見なす。イエスは故郷の者たちにとって、あまりにも「身近」なのである。この身近さが、イエスの「真の姿」を見せないようにさせてしまうのである。ちよほど、偉人や聖人として世間の人々から尊敬され崇拜される者も、近親者にとつては「ただの人」でしかないことと同じ現象である。日常性とは、いかなる偉人をも、人々と同じ空間・時間を生きてしまうことよって、「ただの人」にしてしまう。イエスもこのことは十分に分かっていて、イエスは語る。

「アーメン、わたしは言う、いかなる預言者も、その郷里では歓迎されない。本当にわたしは言う、郷里でえらい働きをした預言者がどこにあるか。預言者エリアの時代に、三年六か月、天が閉じて雨が降らず、国中に大飢饉があつた際、イスラエル人の中に多くの寡婦がいたのに、そのだれの所にもエリアは遣わされず、

「異教国シドンのサレプタにいた一人の寡婦の所に」だけつかわされた。また預言者エリシアの時、イスラエル人の中に多くの癩病人がいたのに、そのだれも清まらず、異教人であるシリア人ナアマンだけが清まった。神の恵みはかえって異教人に与えられる。」

(ルカ、4―24―27)

イエスのこの言葉に傲慢さを見て取った礼拝堂に集まった故郷の人々はイエスに憤慨する。悪いのは、イエスでも故郷の人々でもない。故郷にあるという「近さ」(身近さ)が、故郷の人々の目を曇らせてしまうのである。

イエスの特別さ・偉大さは、「両親・家からの離れ」・「民族・故郷からの離れ」という形で明らかにされる。「離れ」は、異常さ・特異さをまた秀逸さを表わす指標である。特にイエスにおいては、「離れ」は、生まれながらの「もともとの離れ」という形で「離れから離れる(離れを奪取する)ことがなかった」(普通の人間になることが一度もなかった)ことに、イエスの「人格」の特徴を見ることができるであろう。

## ② 仏陀(シツダールタ)の家出

旧約聖書的な視点からすれば、人類は、目下、家出している(させられている)状態と言えるであろう。禁断の木の実を食べたアダムとエヴァは、神に背いたことよってエデンという「家」を追わ

れた。つまり神によってエデンから勘当されたのである。勘当されたからこそアダムもエヴァも絶対にエデンに戻ることがないのである。

人間であるためには、われわれは「家出」をしなければならぬ。家出によって距離をとることによって、われわれは自分自身を知る。このメカニズムは、アダムとエヴァ以来変わっていない。

そして「その後のアダムとエヴァ」は、自らの「ふるさと」であるエデンを思い出して望郷の念に駆られることはない。そうであるのは彼らの「ふるさと」としてのエデンが、彼らに思い出として思いつく何ものをも与えなかったからである。「ふるさと」にいる父と母としての神（ヤツハウエー）の愛は、彼らが禁断の木の実を食べ、そのことを神に白状した後に、エデンを追放される直前に裸である彼らのために「皮衣」を造ってやったときだけである。

家出の本質を明らかにする本論のためには、旧約聖書を材料とするのでは十分でなく、また生まれながらに「離れ」を体現してしまっているイエスのあり方でも十分ではない。ゴータマ・シッタールタ（釈迦）こそが最適な事例であると考えられよう。なぜなら、釈迦は普通の人間の生き方をしていたのに、或るとき突然自ら進んで家出するのである。というのも、家出をしなければ釈迦は自らをしかと捉えることができないからである。

仏教の祖である「仏陀」には、多くの名号がある。われわれに馴染み深いものでも、ブツダ（覚者の意）とカナ書きされる場合もあるし、釈迦族の出身であることから釈迦（シヤカ）・お釈迦さまと

呼ばれることもある。また釈尊とも言われる。名号の数は百を越えるほどにもなるそうである。本書では、文脈に応じて、幼名の「シッタールタ」・「王子」・「仏陀」を使い分けるが、それらが同一人物であることをあらかじめ断っておきたい。

#### i 人間的なシッタールタ

仏陀の生涯も、イエスの場合と同じように、奇瑞をもって彩られる。否、仏陀が特別な人であることを表すために、仏陀誕生以前、さらには仏陀が母マヤー妃の胎内に宿る以前の出来事が語られる。仏陀の現世での生涯は八〇年。仏陀のような偉大な人格が形成されるためには、八〇年は余りにも短い。そこで仏陀は誕生以前、無限の長い間にすでに自らの人格を完成させ、トソツ天において、神々の上に立つ存在として、神々を教化していたのである。トソツ天での神々の教化は、次に、人間界に降り立って仏陀として人間界を教化するための準備であったのである。仏陀の前生は、人間界に降り立つ（下生<sup>げじょう</sup>）ためということに収斂する。神々の世界と人間界とは、この下生によって結びつく。この関係は、後にさとりを開いた仏陀が、教化されるべき人々に仏陀の話を書く準備がなければ、説法をしても無駄であると考えて、説法を断念しようとしたことと同じ力学が働いている。そして仏陀の守護神の一人であるマハーブラフマン神（大梵天）が、仏陀に説法することを勧め、仏陀もようやく説法する気になる。

ボサツたちや神々の意のままに、下生の適切な時と場所とが設定

される。互いに異質なものの結びつきは、いつも一方の側の一方的な決定によって行われる。そしてこの決定は、受身的である衆生に向けて、衆生を最終目標にしてなされる。

マヤー妃が、仏陀下生の媒介として選ばれ、彼女は受胎する。誕生直後にも多くの奇瑞が起る。そして仏陀を生み終えたマヤー妃は、出産の七日目に「役割」を終えて他界する。

仏陀は、シャーキャ族の王子としてこの世に生まれ、イエスと比べるならば、非常に裕福な環境で育つ。仏陀は、確かに他の子供よりも頭脳明晰で武術の技にも秀でていたが、さりとて王国の王子として人間の子供であることに変わりはない。王子自身も、自らを「人の子」と感じている。ただ、アシタ仙人の予言や、王子を見る人々が、王子のうちに普通の子供ではない何か神秘的なものを感じていただけである。

王子シッダールタは、一七歳のときに結婚する。そして当時の王国の慣例として、王子も三人の妃をもった。特に正妃のヤシヨータラは、誇り高き女性として、妃の権利を主張し、妻としての自覚も十分にあり、その意味では、王子も通常の夫婦の在り方を続けていたようである。

## ii シッダールタの家出

シッダールタは、将来王になるべき者として、なに不足のない青年時代を送る。宮殿の中では、「穢らわしいもの」はすべて王子の前から取り除かれた。「穢らわしいもの」は幸福の障りとなり、王

子に人間の影を見させることになるからである。したがって王子が農耕儀礼を執り行なうために、また城外の御苑に遊びに行くために外出する時が、王子にとって現実を見る唯一のチャンスであった。幸福であるがゆえに、王子にとって農民の困難な生活や、人々の生存のための闘いあるいは悲惨な生活に接したときのショックは、なおさら大きかったであろうことは想像に難くない。

仏陀伝説の中でも特に有名な「四門出遊」は、王子に起こったシヨッキングな出来事を見事に描き出している。王子は、ある日郊外の御苑に遊びに行くために城を出ようとする。王子の父のシュツダナー王の配慮で、御苑までの沿道は、美しい花々が撒き散らされ、木々は金銀宝石の鈴で飾られ、まさにこの世の天国が作り出されている。それは、王子に「穢らわしいもの」を見せないためである。

王子が城の東門から馬車で出ようすると、一人の老人がとぼとぼと歩いて来る。老人の姿は、腰を曲げ、瘦せ衰え、歯は抜け、鼻汁を垂らし、まさに老醜そのものであった。王子は、馭者に老人について尋ねる。馭者は、だれでも貴賤の区別なくあのような醜い老人にならなければならないことを王子に教える。王子は悲しくなると、城へと戻ってしまう。そこで王子は今度は城の南門から出掛けようとする。そして門のところでは病人を見る。今度もまた馭者から、だれでもが病気に罹らなければならないことを教えられ、また悲しくなると宮殿に引き返す。次に、王子が城の西門から出ようすると、葬式の行列に出会う。王子は死とは何かを馭者に問う。馭



者は答えて、「死とは魂が肉体から去り、生命の働きがなくなりません。父母、兄弟、妻子その他愛する人々とも永遠に遇うことはできません。死ぬということはこのようにたいそう悲しいことです。そしておよそ生まれたものは誰でもみな死ななければなりません」と言う。この馭者の言葉を聞いた王子は、自らも死に会わなければならぬことを思い、生を無駄に過ごすわけにはいかないと、御苑に出掛けるのをやめにしてしまう。次に、王子は城の北門から出掛けようとする。王子は門のところで、出家した僧に会う。その僧のまったく不安のない堂々とした姿を見て、王子は馬車を降りて僧に挨拶をする。そして僧に出家の意味を問う。僧は自らの体験から、真の聖の道を、また永遠なる解脱の方法を、つまり出家の法を王子に教える。王子は、自ら求めていた道が僧の口から語られるのに感激し、自らも出家者の道を歩まんと決意し、喜び勇んで宮殿へと戻る。

この「四門出遊」の仏陀伝説は、いろいろなバリエーションで語られる。これらの出来事が別々の日の場合もあるし、一日の出来事の場合もある。また王子は老人と病人と死人に出会うだけで、出家については語られない場合もある。

王子は、この世の苦について何も知らない。だから幼子のように、素朴に老・病・死について尋ねる。ここでわれわれは王子の世間離れた非常識あるいは無知を責めたくなる。しかしむしろ俗人としてのわれわれは、王子のように素朴な質問をすることなく、また老・病・死を自分のこととして受け止めることなく、通念によつ

て判断してそれらの事象について分かった気になっている。それは事象を隠蔽することではないであろうか。われわれは、幼児のように、若きシッタールタのように、老・病・死を受け止めなければならぬ。

王子としてなにも不足のない幼年時代を過ごしたシッタールタは、老・病・死という人間にとつてどうにもできない事柄に接してはじめて生きることの苦しさを知る。そしてその苦は、俗人のわれわれのそれよりも、王子であることにおいて、一層深刻であったことであらう。それは王子にとつてはじめて、金銀宝石をもってしてもどうにもならないものとの出会いであった。

「四門出遊」で王子が最後に城の北門から出ようとして出家僧に出会うことは象徴的である。「苦」とは、人間の力ではどうにもならないものごとである。その「苦」が、老・病・死で表わされる。老を回避し、病を嫌悪し、死を遠ざけること、これらはまさに人間の生への執着から発する。そのとき人間は、生に、しかも青年期・壮年期の体が自由に動く頃の生に、絶対の価値を置いている。王子が城の北門で出会った出家僧は、この苦からの超越に努め、そのことが可能になった者である。王子は出家僧の中に自らの理想像を見る。それは、日常性にあつてはすべての事柄が人間を生への執着へと向かわせるよう強制しており、したがって日常性からの離脱こそが絶対的な「生への執着」を相対化する唯一の手段であるということである。

## iii シッタールタの俗人としての悩み

仏陀伝説は、「人間としての仏陀」と「神々の一員としての仏陀」とが微妙に交錯する。仏陀がこの世に生を受けることが、すでに神々の配慮のもとにあり、「四門出遊」も、浄居天の天人の王子に対する配慮（詭計）であることになっている。しかし、もちろん王子は自らの運命が浄居天からの配慮であることをまったくも知らない。だから王子は、人間として真剣に悩むのである。

出家あるいは家出ということが決定的な意味をもつのは、「家」に生まれ、「家」を形成し、そして「家」に悩むからこそであり、「人間としての仏陀」とは、家によって悩まされまた家によって「真理」を隠されつつ生きる一個の人間という意味である。仏陀に比べて、イエスは生まれながらに出家してしまっているので、「日常性からの脱出」ということを意味付けようとしても不可能である。仏陀もイエスとともに「選ばれた人間」でありながら、仏陀は一度「普通の人間」となり、そこから「選ばれた人間」へと再生していくのである。

王子は「普通の人間」として、幼年・少年・青年期を過ごし、結婚して子供を儲ける。王子にとって幼・少・青年期の家は、親によって定められた家であり、父親（シュッドダナー王）の意向のままに動かされる受動的な家であった。しかし、結婚し子を儲けて自ら家を作るとなると、家は今までとは異なった様相を呈するようになる。親にとっての家は、自分のものであり「能動的に」対処しなければならぬものとなる。特に父親は家と同格となり、だから父親

の家からの離脱は、母（妻）にとっても子にとっても家の喪失という人生の決定的な転換点となる。仏陀は一七歳で結婚し、二九歳で出家をする。仏陀の結婚生活は一二年間であるが、仏陀一七歳のとき妻ヤシヨータ妃はまだ幼く、仏陀が送った実際の結婚生活は、数年といったところであろうか。事実、仏陀の子ラーフラが誕生するのが、仏陀の出家前後の頃であったというから、仏陀出家の頃は、まだ新婚の雰囲気が漂っていたと思われる。

子供が生まれるということは、家を離れるのが困難となる決定的なことを意味している。「子は鎧かすがい」と言われるように、親は子供のためにあるいは子供を理由にして、家を放棄するのが一層困難になっていく。つまり、子供の「かわいさ」が親に保育の義務（衝動）を与え、家を放棄したくても子供の存在がそれを押しとどめさせてしまうのである。

仏陀の子ラーフラの誕生が、仏陀の出家の以前か以後かは明らかになっではない。しかし、少なくとも出家以前に正妃ヤシヨータラが懐妊していたこと、また仏陀がラーフラの誕生をどこかで聞いて知っていたことは事実のようである。子供に対する愛情、あるいは「かわいらしさ」の感覚は、誕生直後にすぐ生ずるものではなく、保育、日々の交わりを通じて徐々に形成されていくものである。二・三歳児が最も「かわいい」と言われるのは、子供との歴史が形成され、また親の庇護を必要とする従順さがまだ子供にあるからである。

ある仏伝によると、子が生まれたことの知らせを聞いた王子は、

「ラーフラが生まれた」と叫んだそうである。ラーフラとは「妨げ」・「障り」の意味である。出家者に自らの理想像を見た王子にとって、子供の誕生は出家の決心を鈍らせる「障り」と思われたのであり、このままざるざる子供との生活を続けるならば、出家の道はまったく閉ざされてしまうと予感したのである。王子にとって出家の最後のチャンスは、生まれてくる子をまだ見ぬあいだであり、「かわいらしさ」を実感する前であったのであろう。「四門出遊」の伝説が、ラーフラ誕生と同時期であるのは、まさにぎりぎりのところでの王子の決断を語らんとしていると考えてよいであろう。なお、ラーフラには「妨げ」・「障り」の意味もあるが、また「月食」の意味もある。ラーフラが月食の日に生まれたからそう命名されたとも言われている。ともあれ、地球が太陽と月の間に入り込んで、月に当たる光を妨げて月を欠けさせる月食は、子供の誕生が王子の「さとり」（苦からの解脱）を妨げることとして、なんとも象徴的である。

#### iv 残された者たち

出家も家出も極めて個人的な事柄である。個人にとって、出家や家出は、そのようにしかこれから生きていく道がないと思われたとき、家族や他人の迷惑を一切無視してこそ実行され得るものである。個人の出家の決意を当人以外はまったく理解できず、ただ自らの立場から、出家する者を思いとどまらせようとしたり、恨んだりする。

シッタールタの出家の決意を打ち明けられた父シュッドダナーは、「何でも望みをかなえてやるから留まってくれ」と王子に懇願する。父と子は、ここでまったく反対のベクトルをもっている。父は息子の出家の動機を、城（家）において何か不足・不満があるからだと思っているが、子シッタールタは、すべての望みをかなえてもらってもなお、あるいは自らの望みはすべてかなってしまうからこそ、出家の道を選んだのである。この父と子のベクトルの違いは、価値観の違いとも考えられるが、シッタールタは価値（観）のない世界（苦のない世界）への脱出を試みようとしているのであるから、このことに対してすでに日常的価値は通用しない。父が、出家しようとする子を引き止めようと必死になって子に向かって吐く言葉は実に痛々しい。それは、現実的な価値世界にしか生きられない者の絶望的な叫びであるからである。

正妃ヤショーダラは、出家した夫（シッタールタ）に対して、父とは別の感情を抱く。仏陀は正妃のヤショーダラに対しては出家の意思を打ち明けることはしなかった。愛馬カンダカに乗り、手綱を馭者のチャンダカに引かせて城を出た仏陀は、出家者にふさわしい装いになると、愛馬と御者を城へ帰す。夫の出城を知り動転したヤショーダラは、帰ってきた馭者のチャンダカを激しく責める。そして次のように今はいなくなってしまった夫に向かって語る。

「私はこれまで忠実にあなたに仕えてきました。どうしてこの私を捨てて一人で行ってしまったのですか。昔から宗教の修行のた

めに王が位をすてて山林に入ったという話はいくらか聞いています。しかしそういう時には妻や子もいっしょに連れて行ったという事です。夫婦そろって頭を剃って出家して苦行したそうです。また夫婦そろって神々を祭って功德を積んで死後に天に生れるということも聞いています。あなたは私を捨てて自分だけ天に生れて天女と楽しもうというつもりなのですか。こうしてあなたに捨てられた私の心がはりさけないのは、私の心が石や金属でできているからでしょうか。」

「今日から太子にまたお目にかかれるまでのあいだ、私は正式の寝床に臥すことはしません。香のある湯に浴しません。身体を飾ったり、こすったり、化粧したり、模様のある着物を着たりしません。寶石や香水塗香や花飾りを付けません。うまい食事、うまい飲み物を口にせず、酒をすべて断ちます。頭髮の手入れもしません。たとえこの身は家の中に住んでいても、常に山林にいるつもりで苦行の生活をいたします。」

〔新釈尊伝〕 渡辺照宏、大法輪閣、一一四―一一五頁

ヤシヨーダラ妃は、自己を主張するしつかりした性格をもっていた。そのことはまた気の強い女性とも言われることになる。彼女が上のような自己主張をしなければならぬ立場は、シッタールタと夫婦であるという点にある。夫婦はすべてにおいて互いに協力して事を行うべきである、という。夫婦である以上、一人のわがままは

許されない。ヤシヨーダラ妃は裏切られ捨てられたと考える。それは、浮気をした夫を責める気持ちとよく似ている。どんなに善いことでも、夫婦であるかぎりは自分勝手に行ってはいけないのである。彼女は家出の真の意味を、あるいは夫シッタールタの真意を理解できないので、家出すらも家族で行う儀礼の一つといったほどに考えている。したがって彼女は、夫と共同体験をすべく、夫が現われるまで自ら疑似的な出家体験をしようと決意する。

一人のものが出家して、家に残されたものたちの狼狽ぶりはそれぞれの立場によって異なる。父親は家（王国）の跡継ぎがいなくなることを嘆く。王子の誕生の折、アシタ仙人が「この子は仏陀になるにちがいない」と予言したことを、父は嬉しく思ったが、今となっては、そんなに偉い人物になつてくれなくても、せめて王位を継承してくれれば、と思ったことであろう。妻は夫の勝手な行動に、夫婦としての一体感の消滅を感じて、捨てられたと思う。残された者たちは、家の持続を当然のことと考えて、家の機能停止を自らの立場から嘆く。家族はいつも家の内部にいて家を機能させていなければならぬのであつて、家の外に出て家を眺めることは許されないのである。

#### v 自らの出家を振り返る

仏陀は三〇〇三五歳のころ「さとり」を開いたといわれる（成道）。悟りを開いた後の仏陀が語る「出家の意味」を仏陀の言葉から拾ってみよう。

- 33 悪魔パーピマンがいった。  
「子のある者は子について喜び、また牛のある者は牛について喜ぶ。人間の執著<sup>しゅうじやく</sup>するものものは喜びである。執著するものものない人は、実に喜ぶことがない。」  
師は答えた。
- 34 「子のある者は子について憂い、また牛のある者は牛について憂う。実に人間の憂い<sup>うれい</sup>は執著するものである。執著するものものない人は、憂うことがない。」
- 207 親しみ慣れることから恐れが生じ、家の生活から汚れた塵が生ずる。親しみ慣れることもなく家の生活もないならば、これが実に聖者のさとりである。
- 208 すでに生じた（煩惱の芽を）断ち切って、新たに植えることなく、現に生ずる（煩惱）を長ぜしめることがないならば、この独り歩む人を（聖人）と名づける。かの大仙人は平安の境地を見たのである。
- 220 両者「在家者と出家者」は住所も生活も隔たっていて、等しくない。在家者は妻を養うが、善く警戒を守る者（出家者）は何ものをもわがものとみなす執著がない。在家者は、他のものの生命を害って、節制することがないが、聖者は自制し<sup>いひわ</sup>ていて、常に生命ある者を守る。
- 772 窟<sup>いむ</sup>（身体）のうちにとどまり、執著し、多くの（煩惱）に覆われ、迷妄のうちに沈没している人、——このような人は、実に（遠ざかり離れること）（厭離）から遠く隔たっている。
- 288 子も救うことができない。父も親戚もまた救うことができないからである。  
（「ブツダのことは」——スッタニパーター、岩波文庫）
- 62 「わたしには子がある。わたしには財がある」と思って愚かな者は悩む。しかしすでに自己が自分のものではない。ましてどうして子が自分のものであるうか。どうして財が自分のものであるうか。
- 87 賢者は、悪いことがらを捨てて、善いことがらを行なえ。家から出て、家の無い生活に入り、楽しみ難いことではあるが、孤独のうちに、喜びを求めよ。
- 210 愛する人と会うな。愛しない人とも会うな。愛する人に会わないのは苦しい。また愛しない人に会うのも苦しい。
- 211 それ故に愛する人をつくるな。愛する人を失うのはわざわざいである。愛する人も憎む人もいない人々には、わずらいの絆が存在しない。
- 212 愛するものから憂いが生じ、愛するものから恐れが生ずる、愛するものを離れたならば、憂いは存在しない。どうして恐れることがあるうか？
- 287 子どもや家畜のことに気を奪われて心がそれに執著している人を、死はさらって行く。——眠っている村を大洪水が押し流すように。

い。死に捉えられた者を、親族も救い得る能力がない。

289 心ある人はこの道理を知って、戒律をまもり、すみやかにニルヴァーナに至る道を清くせよ。

〔ブッダの真理のことは感興のことは〕—ダンマパダー、岩波文庫

仏陀の言葉は、まさに日常性から「遠ざかり離れること」の勧めである。

家・家族から離れることは、苦からの離脱の第一歩である。なぜなら家が家族に家族の在り方の基準を与え、また愛着・愛情の湧き出る場ともなるからである。愛情は執着となり、執着は期待を生む。そして期待が成就しないときは、その不成就に苦しむ。家は持続と発展とを要求する。だから家が苦のはじまりなのである。

家は、あるいはは家族（特に子ども）は執着の根源である。仏陀は、家・家族を憎悪して、出家を勧めているのではない。執着を生み出す家という形態を、真理を隠すものとみなして、そこからの遠ざかりを語るのである。

（続く）